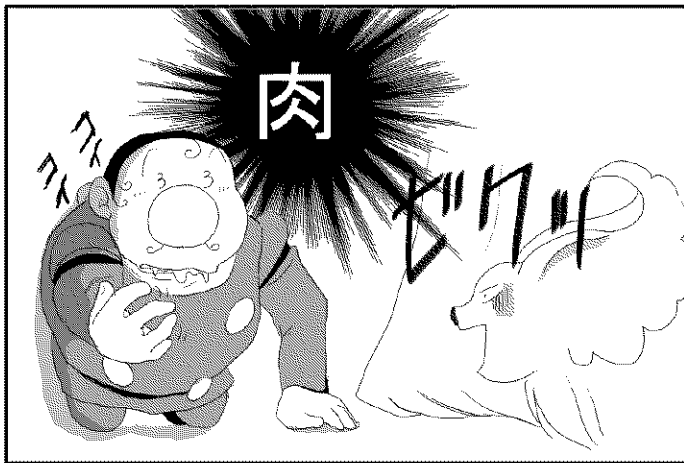


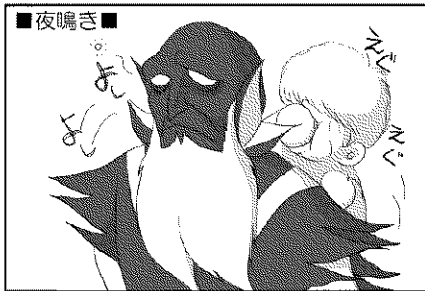
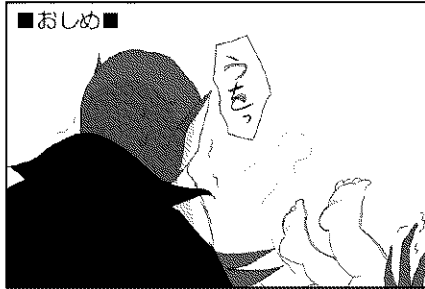
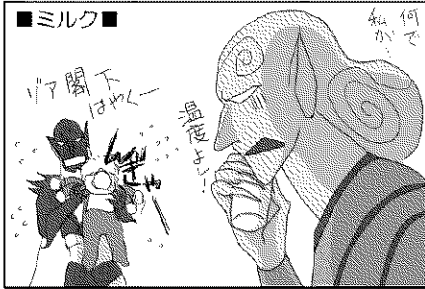
超銀ファンクラブ通信



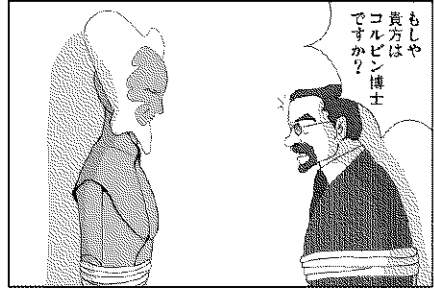
Mokuji

扉	1
目次	2
超銀4コマ	3
サバ日誌	8
超銀資料ご紹介	12
落日の賦 (小説:紫野 挿絵:i-ma)	14
超銀 / Pマンガ	61
あとがき	62
奥付	64

こんにちは赤ちゃん



学者魂





地球に到着。母さんたちが探知した宇宙
 科学研究所とかいうみすばらしい建物近海
 に着水。地球人からのコンタクトを待つ。

到着後二日経過。ようやく機体に地球人
 が近づく。トロいんだよ！ それにしても
 水棲型か？ 資料によれば地球人は地上型
 のはずだが……ともかく出て行ってみるつ
 もりだ。ゾア殲滅のために協力させなければ
 ならない。嫌だと言うならイシユメール
 の総力を挙げて叩き潰し、服従させて速攻
 出動させてやる。待ってて父さん。

超銀河伝説 関連資料 その一部ご紹介

私たちが所持している超銀関係の本の一部をご紹介します。全部はとて今回載せ切れませんでした。



アニメ映画が放映される時には必ず出るというフィルムコミック（講談社アニメコミックス）

高い所有率があると思われる徳間書店のロマンアルバム（写真下白い本）



（上になっている 009 が銃口を向けている本）

少年サンデーグラフィック 映画サイボーグ009超銀河伝説 小学館 昭和56年1月発行

★ 見所は本誌特注カラーイラスト「戦士たちの恋人」シリーズ。映画に出てきたシーン以外に、009とイシュキック、009とヘレナ、神々との戦いでちらりできてきた93ベッドシーン、008とカール、002とイシュタル（イシュタル種が違う）、008とオカピの心臓を取りに来た娘、004とピーナ、の絵があって面白いです。

ジ・アニメ増刊 サイボーグ009超銀河伝説 特集号 近代映画社 昭和56年1月発行

★ 全絵コンテあり。DVDでカットされた002と004がイワン誘拐後に駆けつけるシーンが絵コンテのNo.24から31に。

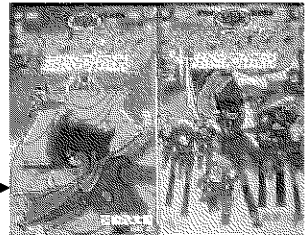
「俺さえどシ踏まなきゃ」の台詞もDVDでは省略されていますね。

★ 絵コンテNo.134と135に004が002へカナダへ一緒に行こうというシーンがちゃんと出てました。これもなぜかDVDでは省略されてるんです。



上は、パーフェクトメモリアルデッキ サイボーグ009 超銀河伝説 リイド社 昭和56年1月発行

下は、映画のパンフレット 東映株式会社発行



100てんランド サイボーグ009 超銀河伝説 双葉社発行 書き文字がかなり笑えます。

※ 前頁の注意書きご参照下さい
タマラがもし男だったら……の
3総受シリアスメロドラマです

落日の賦

渡す限りの崩壊と人民の嘆き哀しみ——その悲しみの思いが波動となって彼の心に強く響いていた。

しかし目を逸らすことはできなかった。独り囚われの身となり、何もできないまま特殊なクリスタルの中で物理的な時間のみ止められても、心と意識は自由に動き回れる。

彼が王として彼の星と人民たちを気にかけない日はなかった。意識を飛ばして彼らの傍に行っても何の手助けもできない歯がゆさ。苦難に喘ぎ、倒れ行く人々を見つめるだけしかできない苛立たしさ。今の彼は超能力者であっても、物理的に手を差し伸べて彼らを救うことができない。遠くまで見通し、物体をこの場所からあの場所まで念の力で移動することはできても、人民の悩みや文明の崩壊をどうすることもできないのだ。

残酷な独房。

いつそ意識もなくなってしまうたらと、何度願ったことだろう。

時を止められた身体は老いることも病気に罹ることもなく、この中にいるかぎり永遠にそのままである。意識だけは時間を感じ、季節を認識し、感情や思考の活動を止められないままに、彼は全てを感じ、考え、悩み尽くしてきた。彼の王としてのプライドは気が狂うことすら己に許すことなく、その責任感によって常に星や人民の様子を見つめ続ける。痛みや悲しみを感じる心は既に激しく波を打つこともなく、その深い瞳からは涙が枯れつくし憂いの色のみを残していた。

彼は何も感情を動かさずただ観察者としてそこにいる。

彼の目の前で時は移り過ぎていった。

どれくらい時が経たのかもわからない。暗黒に閉ざされて何も感じなくなっただけの心に、ふと閃きのように現れた小さな光の子感。

(なんだろう、これは?)

彼はその柔らかい春の光に似た小さな子感を見逃さぬように注意深く意識を向けて行った。光は時と共にその輝きを増し、子感はず日に日に確かなイメージとなって彼の脳裏に映し出されるようになってきた。

確かなことは、その光が波乱を含みつつ彼の元へ向かっているということ。子感というのは数ある可能性のうちも一つも心に響き共鳴したものであり、そのイメージが現実化すれば予知が当たったと言われる。

(いや、まだわからない。この光はもっと遠くを目指している……)

光は遠き兄弟星からの来訪者。

予感がした。

長い冬眠の末に目覚める動物はきっとこんな予兆を感じるのだろうかとか彼は思った。

もちろん彼は眠っていたわけではない。不自然に時を止められ眠ることもかなわずに、ただ意識だけが、この時間の牢獄に隔離された時からずっと覚醒していた。不安、恐怖、心配、あらゆるネガティブな感情を克服したというよりは、気が遠くなるほどの長い時間の中でそれらが消滅したとしか思えない。

希望は何一つなかった。

彼の意識が望めば目前に浮かぶのは望んだ場所の光景——彼は超能力者であった。それらの光景はどろどろと見ても明るく楽しいものではなく、見

その目的も目指す地点もやがて読み取ることができた。本来ならば、彼らはこのファンタリオン星に立ち寄ることなどあり得ないし、その必要もなさそうだった。だが、何かが起こる予感がした。その通りならば彼らは必ずこの星に来る。

もしそうなら？

彼はその後の『もっとも強い可能性』に意識を合わせ、近い未来のイメージを読み取ろうと集中し始めた。

彼らがもしこの星を訪れることなく過ぎ去った場合、このファンタリオン星では全てが何事もなかったかのように『そのまま』である。人民も自分も何も変わることはない。これまでの気が遠くなるような静止した時間がただ延長されるのみだろう。

だが、彼らがもしこの星を訪れた場合には時間が動き始める。

（おそらくそうなる。心に強く響いてくるこの感覚は……彼らに出会うことになる）

時の牢獄から救い出され、この暗い洞窟内から再び明るい陽の光の下に出ることが出来る。絶望に氣力をなくしかけていた民衆の熱狂的な喜びの様子が見える。だが束の間の自由と喜びを得た後に見える空襲、人々の逃げ惑う姿、そして己の命が消える時

（それだけではない。これは……恋の予感か？）

皮膚にも命尽きる前の僅か数日の間に、彼は生まれて初めて異性に惹かれることになるようだった。それも実らぬ恋。空襲で彼が死ぬ運命にあるから実らないのではない。相手には既に想いあった恋人がいるらしかった。

（どうしたのか。このまま彼らが星に降り、彼らに救い出され、実らぬ恋をすれば、星の行く末は破滅……）

予感どおりに全てシナリオが動いてしまったら、待ち受けるのはタガス軍団の再度の来襲と星の再破壊である。多くの人も彼自身も命を失うことになる。

（何か変えられないだろうか。小さなことでもいい……予感とは違う未来があれば、この星は救われるかもしれない）

彼の祈りむなしく、運命は確実に009たちを航行不能な状態に陥らせ、最も近いこの星へと導いていた。

イシユメールがついに宇宙船格納庫に入る。

009たちが二グループに分かれて星を探索し始めるのが見えた。

（このまま彼らが私に会うことなく、エネルギー補給を速やかに行ってすぐ帰ってもらえればいいのだが）

それが無理なことはわかっていてた。

むき出しの岩石に含まれるハイドロクリスタルは微量であり、イシユメールにはそれが燃料を抽出精製する機材もない。王族である彼だけが、009たちに協力して燃料や食料を供給できる立場にあった。

（やはり運命には逆らえぬのか？）

それでも、些細な事でも変えてみる努力は怠るまいと彼は決意した。予知能力は、未来を有効活用するためであるのであり、その通りにシナリオが進むのをただ指さくわえて呆然と見るためではないのだから。

「007はサバと一緒にイシユメールに残ってくれ」

「ええーっ！ 何で俺が……」

「命令だ……」

しぶしぶ顔く007の元を一行は離れて歩き始めた。

003が先頭になり、道案内をしながら暗い洞窟を進んだ。ふと背中に覚えた感覚に、彼女は鋭く振り返る。

「ん？ どうした、003？」

「……いま何か、視線を感じて」

彼女の答えを聞いた002が笑った。

「そりゃあ、君の背中を見て歩かないと迷っちゃうからな、俺らは」

「あ、そうよね」

003はそれ以上何も言わずに再び歩き始める。列の最後尾を歩いていた009は、鋭い視線を辺りに走らせた。

（確かに、妙な気分にはさせられるな。誰かに監視されているような……いや、気のせいだろうか）

サバの説明では、飛行船格納庫システムが生きていて自動的にイシユメールを地下へと導いたのだろう、ということだった。上空からの探知では、文明的なエネルギーの流れ、つまり、電気とか電波とかいった類のものは皆無

だった。おそらくこの星は何らかの理由で滅びたのだ。

文明が賑わっていた頃同様に動いた格納庫システム。そして地下ゆえに往時のまま保存されたこの通路が滅びの年月を感じさせないので、ことさらに不気味に思えるのだろうか。

「出口よ」

003が扉の横を何やらまさぐっていたが、カチンというスイッチ音と共に、重厚な靴み音を立てて分厚い扉が開いた。

「……ドアは開いたが」

「ああ、塞がってるな。土砂か、岩か？」

「岩だわ。厚さ二メートルくらいの大物だけど、005も？」

「俺、やってみる」

「あんさんダメなら、ワイの火もあるね」

006が腹鼓をポンと叩いた。それを横目で見て鎖きつっ進んだ005が、渾身の力を込めると、大岩がジリジリと動き始めた。隙間から入り込む陽光が徐々に太く明るくなっていく。額の汗を拭う事もせずに、大男は仕事を終えると、僅かな笑みを腫に浮かべて振り返った。

「助かったよ、005。よし、外に出てみよう」

ようやく彼らはファンタリオン星の地上に出た。

009は眩しげに目を細めて空を見上げた。この星の空が青いのは大気の組成が地球に似ているからなのだろう。おかげで呼吸もできる。指示はして知らないもの全員、酸素ボンベ呼吸から自然呼吸に切り替えたらしかった。未知のウィルスや細菌の危険性はない。着陸途中にサンプリングしたこの惑星の空気と水は、天オ的な頭脳を持つコマター星の少年がとっくに分析し、地球人にとって安全と判断を下していた。

009は再び指示を出した。

「それじゃ二手に分かれて探索しよう。僕と004と003がこっちへ行こう。あとは……」

「困るアル」

「え」

「003がいてくれないと、食材探せないアルよ」

「……食材より、ハイドロクリスタルなんだが」

眉をひそめた009に対して、006はずいとい進み出た。彼は食の重要性とメンバーたちの食管理における自分の責任について熱く語り出したが、0

02と005が、右から左から006の腕をがしっと抱えて、ずるずると引きずり戻した。

くすくす笑っていた003は008に向かって叫んだ。

「インスペクターを投げて……」

「え？」

「いいから、お願い」

立ち止まって振り返った008は不審そうな顔をしたが、言われた通りにハイドロクリスタル検知器を投げて寄越した。

003はそれを受け取ると009に渡す。

「あなたたちは二人で大丈夫よね？ 私はあっちへ行くわ。クリスタル含有量が多そうな場所を見つけたら連絡するわね」

「フランソワーズ……」

「じゃあね……」

笑顔で手を振り002たちの後を追って駆け出す003に、009は何も言えず見送るだけだった。

004がニヤリと笑った。

「色気より食い気か。……フラれたな、ジョーよ」

009は004を軽く睨みつけた。

「別に、インスペクターがあれば、彼女がこっちに同行する必要はないしね」
009は乱暴に検知器を004に投げつけた。慌てて受け取った銀髪の男は、ふっと笑って、さっさと歩き始める。彼の後を追いつ始めた009は、ふと振り返ってみたが、既に彼女の姿は見えなかった。

（みんな一緒だし、心配する必要はないのは分かっているさ）

それなのに、なぜか彼女と離れてはいけないような気がした。ミッシェン中は絶対に公私混同はするまいと決めているのに、なぜ今、と009は自分で自分を訝りつつ、半ば強引に自身を納得させた。母星から速く離れた未知の星だからこそ、不安な気持ちを呼び起こされるのだろうか。ただそれだけのことだ。

「003、あの池はどうアルか？ うまそうな魚いたら教えるよ……」
「……大きな魚はいるけれど」

彼女の言葉の傍から、大きな水竜と共に巨大魚が跳ねた。

「うひょほ、大きな魚ね!!」

「あんまり食べたくないわね」

そんな言葉も、メンバーたちの呆れたような顔も意に介せず、張大人はどこから取り出したのか大きな網を持って、池の中へジャブジャブと入って行った。

惨劇はその直後に起こった。

異様な影に気づいた003の警告を無視して魚を追っていた006の目の前に、大きな水しぶきと共に水竜が首をもたげて現れた。水面から出ている首の部分だけでも十メートルはあろうか。竜は尖った歯だらけの口をカパーッとあけた。食材の魚を取るどころか006がエサそのものとなりそうな事態に、それまでのんびりとハイドロクリスタルを探していたメンバーたちの間に緊張が走り、戦士の本能が瞬時に戦闘態勢を整えた。

008が素早く水に飛び込む。002はジェット噴射で飛び上がり、池の上に顔を出した水竜を狙ってスーパードガンで撃ち捲くる。池に向かって飛び出そうとした003の腕を005ががっしりと掴んで引き戻した。

「みんななら大丈夫だ」

「でも……あ、ああっ!!」

003は思わず悲鳴を上げた。

巨大な水竜は狙いを002に定め、その大きな口をさらに大きく開けると、一瞬で彼を飲み込んだのである。一方の008はようやく006を救い出し、背負って岸まで泳ぎ着いた。

再度池に飛び込もうとする008を003が止める。

「待って、ジェットなら大丈夫だわ」

「ええっ?」

次の瞬間、水竜の長い首の部分が歪み破裂したかと思うと、002が飛び出して来た。苦しみにのたうちまわり、最後の力を振り絞って水竜が激しい攻撃を仕掛けてきたその時、彼らの目の前の景色が不自然に歪んだ。全員が一瞬眩暈に似た倒れそうな感覚に襲われてよろめいた。気づいた時には不思議な廃墟の中にいた。

003は辺りを見回す。そこには、彼女と同じようにわけがわからないといった風情の仲間たちがいた。

「な、なんだ?」

「ここは……?」

「さっきのドラゴン、いないアルよ」

「……池、ない」

「いったいどうなってるんだっ!!」

002が奇々して叫んだその時、まるで返答するかのように若い男の声が響いた。

「私がみなさんをここへお連れした」

「……?」

廃墟の陰から濃い紫色を基調とした軍服姿の若い男が現れた。その上品で装飾の施されたデザインからすると、一兵士というより将校か身分の高い者だろうと思われた。上着と同じ濃い色のブーツを履いた足元には、犬とも猫ともつかない不思議な長毛の小動物が絡みつくように戯れている。

それまで全く人っ子一人見当たらなかったこの星に突如現れた不思議な男に、全員声も出ないでいたが、003がようやく声を発した。

「あの、あなたは?」

男は微笑んだ。

「私はこのファンタリオン星の王、タマド・ラディ・ファンタール」

「王? この星の?」

「あいや、美形アルな」

「どういうことでしょうか?」

王だと名乗った男は簡潔に説明してくれた。彼には超能力があり、速くからサイボーグ戦士たちの窮地を察してレポートさせたのだという。

仲間のイワンにも超能力があるが、意識がある複数の人間を簡単にレポートさせるだけの精神力はない。それを考えても彼はかなり高度な超能力の持ち主だった。

「あなた方が、ハイドロクリスタルを求めていることは知っている。私も協力しよう」

「それは、とても有り難いお話ですけど……」

「待て、フランソワズ!!」

「遮ったのは002だった。」

「なんか変だぜ。どうもこの星は、そうだ、着陸した時からなんかおかしかった。第一いきなりレポートして助けたり、協力を申し出たり……なんか納得できねえな。こいつが本当に王かどうかもわからねえぜ?」

「ジェット」

「本当のことだろうか!! 俺は気をつけろ、とお願いだけだ」
王はふっと笑った。

「なるほど、確かにそれもつともなことだ。ではこちらの話も聞いていた
だこう。……私には超能力がある。あなた方の目的も敵もこの先の予定も
いたいわかつてる。この星の文明が破壊しつくされた様は見えておわかりか
と思うが、これは全てダガス軍団の空襲によるもの。つまりあなた方の敵と
我々の敵は同じなのだ」

「ダガス軍団がこの星を?」

「待てよ、いったい何十年、いや何百年前の話だ?」

「この廃墟はとも昨日今日壊されたものには見ええない」

王は苦笑しげに答えた。

「ゾアはそう、あなたがたの時間で言う二百年以上前から存在している。野
望の限り周囲の惑星を滅ぼし、従えて、その勢力を宇宙の果てのあなたがた
の星にまで伸ばしているのだ」

「二百年前?」

「この星の破壊も、二百年前だと?」

「そう、星は破壊しつくされ、王族は私を残して滅んだ。僅かに生き残った
人民は文明を失くして先祖返りしてしまったのだ」

「人……? この星の人たちがいるの?」

これまで全く人影すら見かけなかったで、003は驚いた。王はそんな
彼女に優しい視線を送り、言葉が続けた。

「いまの我々には戦術はない……だから、それができるあなた方に協力し
たいというのは理由にならないだろうか。燃料補給も、船の補修も、できる
限り協力しよう。あなた方が一日も早くこの星を発てるように」

本心を言えば、タマドの予感したシナリオより一日でも早く彼らにはこの
星を出て行って欲しい。何かひとつでも不幸なファンタリオン星の未来への
幽事を狂わせた。

「信じてもらえるならば丘の上の神殿に来てもらいたい。ハイドロクリスタ
ルを抽出するツールを提供しよう。……そろそろ力が限界だ……失礼する」
最後に早口でそれだけを言うと、空気に溶けるように王の姿が消えた。

「き、消えた!」

「デレポトしたんじゃねえの?」

「どこへ行ったのかしら」

「やっぱり怪しいなあ。こうやって消えたら効果的だよな。僕たちが追っ
とを計算してるとしかなさえない」

「でも、ハイドロクリスタルを抽出するツールがあるなら貸してもらいた
いわね。神殿……近くまで行ってみない? そこから私、透視してみるわ。
翼があるかどうか」

「それがいいかな。どっちにしろ、あれだけの能力だ。俺らを全買ひつと
らえたんなら、すぐにできるだろうさ」

「あの変な動物、いるアルよ」

006の指差した先の、王が消えたあたりに小動物がちよこんと座って彼
らの話し合いを眺めていた。全員注目を受けると、優雅に立ち上がり、尾
をなびかせながら走り始める。少し走って止まり振り返る様子はいかにもつ
いてこいと言っているかのようだった。

「アイツを追ってみようぜ」

「そうだな」

003が遠くを見つめる目つきをした。

「丘の上の神殿ってあれかしら……五キロ先にバルテノン神殿くらいの大
きの廃墟があるわ。階段があつて土台が……柱が少し残ってるわ」

「ま、行ってみようぜ」

「賛成だ」

一行は互いに顔を見合せて頷き合い、その不思議な小動物を追って走り
始めた。

「翼はなさそうよ」

神殿の周りを注意深く透視探索した003がきっぱりと言った。

「あつちはフランソワーズの能力もお見通しだろうさ。ココに翼がなくなつ
て、俺らをどこかへ瞬時に連れ去るくらいいわけねえって」

「それ言ったらおしまいだって、ジェット」

008は002の言葉に苦笑しつつも油断なくスパーガンを手に取り、
いつでもトリガーを外して構えられるようチェックした。

003がぼつりとつぶやく。

「そういえば、ジョーたちはどうしたのかしら。大丈夫かしら」
「さあな」

「これが済んだらとりあえずイシシメールに戻ろう」

「無事戻ればな」

「行くよ」

神殿に近づくことを決意した彼らは油断なく陣形を組んだ。005が先頭になりすぐ後ろに003が続いた。彼女の両脇を002と008が固め、しんがりには006がつく。

いざ進もうとしたその時、一行のすぐ鼻先にふっと人影が現れた。

「来てくれやうがどう。信じてくれたと思つていいのかな……いや、そうでもないよだね」

「うわあっ……」

「び、びっくりしたアルヨッ」

「……これを」

ふっと目の前に現れた小さな光るものを005が思わず掴み取った。手を開けてみると、それは銀の鍵だった。問うように顔を上げた005にファンタール王は頷いてみせた。

「神殿の地下倉庫の鍵だ。中に機材が入っている。使い方は、あなた方が連れてきたコマダー星の少年なら理解できるだろう。機械の横に宇宙共通語で説明が書かれているのだが、読めるのは彼だけのようだね。それでは」

一方的に言うべきことを言つて彼は踵を返した。

男たちは呆気にとられたように005の手の中で鈍く光る鍵を見つめていたが、003は遠ざかろうとする紫色の後姿に思わず声をかけた。

「待つて……」

立ち止まったファンタール王がビクッと震えたかのように見えたのは、気のせいだったろうか。

彼はゆっくりと振り返つた。

「何か？」

「あ、あの……ありがどう。本当に助かります」

「いや、たいしたことじゃない」

006はベットの小動物に興味を覚えたらしく、手を出してなんとか触ろうとしていた。気づいた白いそのふわふわな動物は驚いて退き、威嚇するかのよう小さく鳴いた。

「ピララ……」

王が気づいてたしなめる。

クワンと小さく鳴いた小動物は006の手を完全に無視して飼い主である王の元へ走り、すつと通り抜けた。

「と、通り抜けた!?!」

「実体がないのか？」

王は苦笑し、ピララを軽く睨んだ。本当は実体がないことを彼らに悟られたくなかつたのだ。理由はもつと知られたくない。

「そう、この姿は超能力で自身の姿を三次元投影しているに過ぎない」

「それでは、あなたは一体どこにいらつしやるのですか？」

「……少々遠いところに。あなた方が一刻も早く補給と修理を済ませて目的の旅に発てるよう祈るよ」

「あ、待つて……」

なおも呼び止めようとした003の目の前で、今度こそファンタール王の姿が消えた。廃墟の間を通り抜ける乾いた風にあたかも連れ去られるかのよう。その冷たい風は彼らに夕刻が近いことを悟らせた。

「ま、初日にしちゃんかなかの収穫だよな」

「とりあえず地下倉庫を確認しに行こうか、その機器とやらを」

一行が、銀の鍵の合う扉を求めて神殿の地下倉庫へ向かうとした時、ピララと呼ばれた小動物がぐるぐると彼らの周りを回り始めた。

「なんだ？」

「気にすんな、行くよせ」

ピララは大きな005の足をすり抜けた。

彼らはファンタール王だけではなくこの小動物も三次元投影されたものだと思ふ。この星の住人はおろか、動物にまで超能力が備わっているとは驚くべきことだった。

ピララは全員に訴えかけることを諦めたかのように、今度は003に狙いを定めて必死でその気を引こうとしていた。肩に駆け上つてみたり、頭の上に乗つてみたり……実体がないゆえに感触も重さも感じないが、単に遊んでいるだけじゃなさそうなのはよくわかつた。

「なあに？ 何か言いたいのか？」

歩みを止めた003がピララに真正面から向き合う。

ピララは我が意を得たりとばかりに彼女の腕から飛び降りると、彼女の周りを数度ぐるぐると回り、今度は彼らが進もうとしているのとは逆方向に飛び出して、ついでこいと促すように歩き始めた。

「どこへ行くの、ピララ?」

003の間にピララは振り返り何か言いたそうな表情をしたが、再度前を向くと尾をびんと立てて今度は走り始めた。

「ほっとけ、フランソワーズ。大丈夫だって」

「でも、何か訴えてたわ。気になって……」

「おいおい、目的を忘れたのかよ」

「忘れてはいないけど……でも、気になるわ、ちょっとだけいい? あまり遠くへは行かないから」

「しょうがねえなあ」

ピララを追って走り始めた003を追う形で、結局は全員が一緒に走ることとなってしまった。

どこへ行くのか全くわからないままに、廃墟を通り抜け、不思議な地形の崖を過ぎ、ピララが立ち止まって彼らを振り返り仰いだのは、洞窟の入り口だった。

「なんだ、ここは?」

しばらく洞窟を見つめていた003は驚いたように目を見開いた。

「……そういうことなのね、ピララ!! 私たちにあなたと、あなたのご主人を助けて欲しいのね?」

ピララは飛び跳ねてキューと鳴くと、ふっと姿を消した。

「おい、どういうことだよ?」

「説明してくれないとわからないよ、フランソワーズ?」

「この洞窟の奥……王とピララが囚われているのよ」

「なんだって?」

「それも、簡単には助け出せそうにないわ……巨大なロボットが守ってる」

「ロボット?」

「やっぱり異かよ」

吐き捨てるように002が言うと、003がむきになって否定した。

「違うわ。あの人は、私たちに助けてくれなんて一言も言わなかった。自分が囚われていることすら言わなかったじゃないの。鍵をくれて、そして、早くイシューメルが飛び立てるようにと……」

002はそれ以上彼女に対して反論はせず、小さく舌打ちをして目を逸らせた。敵かもしれない相手に対して彼女が甘すぎるのが気に入らない。

「うーん、王の言うことが本当ならば敵じゃないけどね」

008は無難で冷静な事実のみ述べた。

「悪人ではない。目を見る。分かる」

「気まずい沈黙が流れた。」

ふと遠くを視る目つきをした003が、突然小さく叫んだ。

「……クリスタル!! ハイドロクリスタルだわ」

「どこに?」

「王とピララが、クリスタルの中に閉じ込められているの」

「本当かい?」

「ええ」

「そりゃすいぶん出来すぎた話だぜ」

「でも行く理由にはなるよ、ジェット」

002と008は顔を見合わせ、頷き合った。

「問題は、一つ目の巨大ロボットよ。姿形に似合わず素早く動くわ。口から熱線を吐く機能があるみたい」

「ふん、相手に取って不足はないぜ! こっちはサイボーグだ」

「そのロボットだけか? 他にトラップは?」

「……ええ、他に震らしきものは見えないわ。ロボットだけがガードみたい」

「よし、行こう」

道案内の003を先頭に彼らは洞窟へ入っていった。暗い道を右へ左へと進み、ようやく出た広い場所に003が言った通りのロボットがいた。

「よし、俺と005がロボットを足止めするぜ。囚われの王はどこだ?」

彼を救って来てくれ」

「よく見て、ジェット。目の前にいるのよ」

「どこに?」

「ロボットのペンダントを見て……」

003の言葉にロボットの胸元に注目が集まった。

緑色に光るペンダントトップの中に見える人影は、間違いなく先の三次元投影で見たファンタール王そのものである。驚いて思わず見入った隙をついてロボットが巨体に似合わぬ素早い攻撃を仕掛けて来た。

「散れっ!!」

戦闘開始だった。

ロボットの攻撃をかわして飛びながら撃ち続けるのはさほど難しくないが、キリがない。ここにいない、004の戦闘能力を思い、002は唇を噛み

締める。かといって004を迎えにここから抜け出すと残るメンバーたちがさらなる苦戦を強いられることになりそうだった。

(こんなことなら、洞窟に入る前にアイツらを呼べばよかったな)

でもそれはそれで面白くない。いつも最後に戦闘の美味しい所をあの二人に持っていかれてしまう。たまにはあの二人がいなくても、と、妙な意地と共に気合が入った。

『002、右上から来るわ!』

003からの通信に002は我に返った。一瞬の油断を突いてロボットが002に掴みかかろうとすると、彼は加速ですり抜け間一髪で避けた。次にロボットの手はペンダントの鎖にしがみついていた003に襲いかかったが、今度はいち早く気づいた002が彼女を抱き取って逃げる。

『ありがとう、ジェット』

『……あんな所にしがみついてもんじゃねえよ、危ねえつたら』

『王と話してたの。彼もロボットの弱点が分からないみたい……心がなにか読み取れないって言うのよ。ロボットの名前がロタックだそうだけど』

『名前なんてどうだっていい!』

『……あと、あのペンダント牢獄のキーは分かっているらしいの』

『なんだ?』

『教えてくれないのよ。倒すのは無理だし時間の無駄だから逃げる、自分は大丈夫だ、そればかり』

『うーん』

『どうしたらいいの? なんとかならないかしら』

『……』

その時、008が二人の通信に割って入った。

『003、聞こえるかい?』

『ええ、008、どうかしたの?』

『ロタックの弱点を透視できないかな? このままじゃ、ラチがあかない』
『視るヒマがないわ。どこか、落ち着いて透視できる場所さえ……』

『ねえよ、そんな場所。速攻ロボット野郎に踏み潰されるぜ』

『遮るように002が答えたが、重なるように008が言った。』

『あるよ、来た道を少し戻ればいい』

『あのロボット野郎が出口に立ちふさがっているじゃねえか』

『ワイが炎で気を逸らすアル』

『俺、ロボット引きつける』

『わかった、その間に加速して出口に003を投げ込めばいいんだな』

今度は王からのテレバシーメッセージが全員に対して投げかけられた。危険だから早く逃げる、クリスタル補給だけしてすぐに星から発て、という王の言葉に003が叫び返した。

『私たちは戦闘のプロよ。ダメだと悟ったらその時は出直すわ』

『そういうこと。王ザンは心配しねえでそこで見えな。とりあえず弱点探して狙い撃ちして……ダメならそんな時や一旦退く』

ファンタール王は激しく揺れるペンダントの中で、しがみついているピララをぎゅつと抱きしめた。

(ああ、そんなのか、やはり私が視た未来は動かせない……彼らは私を救い出してくれるのだろ?)

せめて誰も傷つかないようにと彼は祈る。

この星に襲い掛かる不幸な未来までまだ間はある。救い出された後にも『何か』を変える努力はできるに違いない。

サイボーグたちは絶妙のチームワークでロタックの気を引き、その注意が削がれた瞬間に002が003を出口へ連れて行った。

ファンタール王は、ペンダントトップの壁に張り付きながら、注意深く透視を開始する彼女を目で追う。真剣な眼差しと着い瞳が美しかった。彼女の心は彼とピララを少しでも早く安全に救いたいという思いに満ち溢れている。

そのピュアでひたむきな思いを感じ、久しぶりの温かな心に触れて、彼の心も感応するように熱を帯びた。彼は003から目を逸らし、気分を変ええるかのようにピララを撫でた。

間もなくロタックの弱点を透視により探り当てた003の通信により、四人の総攻撃が開始される。頑丈なロボットは弱点への的確な攻撃にさえ耐えに耐えた。怒り狂うロボットが咆哮を上げて口を大きく開いた隙に、008は005の肩を踏み台にジャンプして、その口に飛び込んだ。

『無茶しやがる』

『飛び込みや泳ぎはピュンマの十八番アルね』

『脚を狙えよ。ピュンマが中にいる』

『あまり揺らさないであげて』

『無理』

四人の総攻撃がしばらく続き、ようやく足にダメージを受けたらしく、口

ダックは沈み込むようにヒザを突いた。002と003は飛び上がったペンダントの鎖にしがみつき、協力してそのチェーンを切るべくスパーガンを撃ち続ける。体内では008が大暴れしているらしく、腹をかきむしり苦しむ様子だったが、やがてくったりと地に倒れていった。

「切れたわー！」

「ジェロニモ、ペンダントを頼む」

ロダックが倒れるのと同じタイミングでチェーンが切れた。002は003を抱えて難を逃れるべく飛び上がる。ペンダントトップは宙を飛んだが、地面に落ちる前に005がキャッチした。

「みんな逃げろ。心臓部に爆弾を仕掛けてきた」

ロダックの口をこじ開けて這い出てきた008が言うと同時に、巨大ロボットが膨張し始め、炎と爆音が辺りを包んだ。

ようやくロダックはその動きを止めた。

「鍵は？」

「どうやったら開くんだろう？」

ペンダントトップを囲んだ彼らに、ファンタール王はロダックのイヤリングが鍵であることを告げた。005が巨躯に似合わぬ敏捷さで二つのイヤリングを集め重ね合わせると、目も眩むほどの光がペンダントから放射された。思わず目を覆った彼らが次にそっと目を開けた時、目の前には王がにこやかな笑みを浮かべて立っていた。

「……助けいただき感謝する。ありがとう、地球の友人たち」

彼らは初めて王の肉声を聞いた。宇宙共通語とやらは理解できないが、彼は氣を利かせてか同時にテレパシーも送ってくれていた。

「急ぎのところ、足止めさせてしまっして申し訳なく思う。まさか、このロダックを倒せるほどの実力とは……」

「よかった、ご無事で。王も、ピララも」

003の言葉に小動物が嬉しそうに甲高く鳴いた。

「私が捕らえられていたペンダントトップを持って行かれるといい。これは純度の高いハイドロクリスタルだ」

「やっぱりそうだったのか」

なぜそれを早く言わないんだ、と責めるような目をした彼らに、王は申し訳なさそうに目を伏せた。

「ロダックを倒す危険を冒すよりも、岩石に含まれたハイドロクリスタルを抽出する方が、諸君にはたやすく早いだろうと思ひ込んでいた。すまない」

「いや、でも、これならかえって作業が進みそうだ」

早くも005は割れたクリスタルの片方を引き上げていた。

「運搬を手伝いたい、このクリスタルには、私の超能力が作用しないで通り過ぎてしまっ」

一同は納得して頷いた。あれほどの力の持ち主が、自身を閉じ込めているクリスタルを壊せないのだから。

やがて王はスッと先に立って歩き始めた。彼らが入ってきた通路とは違う方向へと進んでいく。なぜかついて行く方がよさそうに思えて、彼らも黙ったまま後を歩いた。

急に王が振り返った。

「足元が悪い。気をつけられた方がいい」

目の前に手を差し出されて、003は戸惑ったが、見上げた王の瞳が優しく、そんな光を湛えていたので思わずその手を取った。王はくっくと彼女の手を握り締め、彼女の歩調に合わせてるようにつくりと石段を上がって行った。

（へえ、これはもしかしたら……）

何事かに気づいた008は、思わず横を歩いている赤毛の男を見た。彼の視線に気づいた002は大きさに肩をすくめて見せた。

「神殿に気づいたわ」

感心したように言うと、003は辺りを見回し、何かに驚いたように一瞬立ちすくみ、王を庇うように前に出た。

「どうした、フランソワーズ？」

「群衆が、襲いに来る……聞こえるでしょう、あの叫び声」

その言葉が終わる前に、大地を揺るがすような地鳴りと雄たけびが、彼の耳にも響いて来た。

「戻った方が……」

心配気に見上げた彼女に、ファンタール王は微笑を返した。

「大丈夫だ、フランソワーズ。私の民たちだ」

やがて土煙を上げて怒濤のようにやって来た群衆は、神殿の下を埋め尽くし、タマド・ラディ・ファンタール王の姿を認めると大歓声を上げて一斉にひれ伏した。イザとなったらどう逃げようかとサイボーグたちは緊張しつつ身構えていたが、進み出た王が群衆に向かって話し始めるのを見て、ようやく

く力を抜いた。

彼は本物の王だった。群集は、王の言葉に喜び、泣き、話が終わる頃には大歓声が起こり包んだ。

「人々はあなた方に感謝している。ロタックを倒して私を救ってくれたこと、そしてこれからあなた方がソアと闘うということを」

006が人民を見ようとおそるおそる前に出ると、その姿を目にした人々からさらなる歓声が上がった。

彼らは、得たの知らない宇宙船を怖れて隠れていたらしい。あの船があなた方のものだと思つたからには、修理でも、クリスタルエネルギーの補給でも、何でも喜んで手伝うと言っている」

「それは助かるな」

「私も出来る限りのことをしよう。あなた方が一日でも早く旅立てるように」

「ありがとうございます。ファンタール王」

003の言葉に、王は少し複雑な表情を浮かべ、それから優雅に微笑して頷いた。先ほどまで喜びと希望に満ちて民衆に語りかけていた彼が見せた憂いの表情が、彼女にはなぜか気になった。

(ふうん……タマド・ラディ・ファンタール王か……)

イシュメールの修理作業中にも耳にちらほら聞こえてくる仲間たちの雑談に耳を澄まし、ジョーは初めてその名を知った。

この星に着いた初日に、002たちがタガス軍団によって囚われていた王を救ったという話は聞いていた。そしてそのおかげで純度の高いハイドロクリスタルを手ででき、精製と燃料化のための機材も借りることができた。この星の住民が食料などの物資を快く供給してくれるのも王の一言があったのであるとは分かっていない。

002や003はほぼ日に一度は王と顔を合わせているようだった。あの日に002たちと同行しなかった007は、物珍しさに素直に惹かれて王に謁見に出かけたし、004も二日ほど前には003と神殿に出かけて王に会ったらしい。サバもこの星の建築物や歴史に興味を覚えて連日のように王を訪ねているらしい。

要するに009だけが王と一面識もないままなのである。

挨拶に行かなければと思っていたのだが、二日前の夜にふと漏れ聞いた話が009を戸惑わせ、王を訪ねる気力を萎えさせた。

それは002、004、そして008の会話だった。彼らは009がひっそりと同じエンジンルームの隅でプログラムチェックをしているのを知らなかつたらしい。

「なあ、今日フランソワーズと神殿行ってきたんだろ、ハインリヒ？」

002の一言から話が始まった。

「ああ、完全なる廃墟だが、ああなる前はたいした城だったようだな」

「そうだね。土台と柱から推測できるね」

008は004の言葉に同意したが、002はうるさそうにそれを遮った。

「城なんざどうでもいいって。ファンタール王には会ったろ？」

「会ったがどうした？」

「どう思った？」

「……どうって、たいした超能力者だな。イワンを遥かに越える。俺たち人類と種の起源は同一らしいってことだが」

「そうじゃねえよ!! フランソワーズも一緒に行ったんだろ、って聞いているんだぜ、俺は」

少し不自然な間があった。

ゆっくりと004が答えた。

「……そうだな。たぶんお前が考えてる通りだろう、ジェット」

「やっぱりそうか」

「何の話だよ？」

008が不思議そうに問う。しかし002はお構いなしに続けた。

「だが、フランソワーズの方はおそらく分かっちゃいねえな」

「どううな」

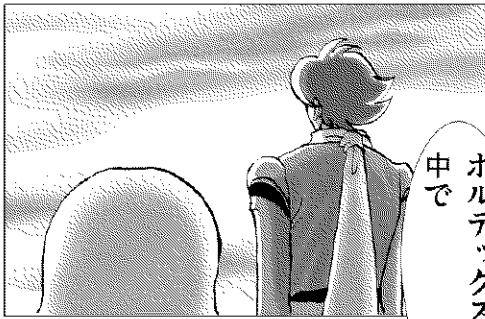
「アイツ、長期の幽閉で同世代の友達がいらない王に同情的なんだ。ちょっとマズインじゃないかと思っただけ」

ようやく008にも合点がいったようだった。

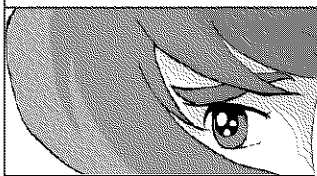
「ああ、あの王様のことか。うん、たぶんフランソワーズに気があるね」

「ピュンマもそう思ったか、こりゃ間違いないな」

「地球の文化とか歴史の話をこの前王に聞かれて、一所懸命話してたよ、彼女。でも別に問題ないだろう？ どうこうするわけじゃないし、あつちだつて王の立場ってものがあるわけだし」



ホルテックスの
中で



どうして
タマラのことを
考えなかったの？
生き返って
欲しいって

わ…判らない…

よ…かった。
生き返ってな…

ジョー

